

サビエル生誕五百年



沈黙の中で

上五島・長崎巡礼①

「人間は旅人である。旅をしながら歴史をつくるが、その旅路は人間を育て精神的に豊かにする。」

すべての旅のうちで最もすぐれたもの、それは神への人の心の旅である。」

これは長崎市西坂にある日本二十六聖人記念館の入り口に書かれている言葉である。一五九七年、この西坂の丘で二十六人のキリシタンが十字架に架けられて処刑された。一五四九年、フラン

殉教した人は二万人を超えるという。

「すべての旅のうちで最もすぐれたもの」といわれても、殉教は余りに残酷で哀しい出来事である。

カトリック作家、遠藤周作はこのことをテーマに『沈黙』を書いた。殉教の物語は全国にあるが、その中心は長崎である。

しかし、豊臣秀吉は一五八七年、キリスト教を禁止し、十年後の一五九七年二月五日、二十六人のキリシタンが、キリスト者がゆえに西坂の丘で処刑された。

以後、一八七三年（明治六年）にキリスト教禁止令が解かれるまでの二百七十余年の間に

に、主よ海があまりに碧いのです」という遠藤周作の言葉の碑も建っている。



海外（そとめ）の「沈黙」の碑

る。「時「踏むがいい」という言葉をめぐって賛否両方の意見が出た。

私は作者の考えに賛成するものだが、この作品は神の問題をいろいろ考えさせられた。

今、長崎は「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」として世界遺産の国内候補となっている。

広島とともに世界で原爆降下という苦しみを経験した街・長崎。この街に私はひかれ

る。会社勤めの時の出張を除き、国内で一番多く訪れている。

その中で、今まで一度も訪れたことがなかったのが上五島である。

平成の市町村合

名ばかりとはいえ、自分もカトリック信徒である。この殉教のことを思う時「自分には到底できない」という思いと同時に、信仰に生きるこの意味を考えさせられる。

二〇〇八年十一月二十四日、二万人を超えるといわれた殉教者のうち、百八十八人の列福式がバチカンから枢

機卿も列席して開かれた。正面右の看板には「命をかけて、いのちを生きる」という言葉があった。

神の国、永遠のいのちを確信するからこそ、命をかけて信仰を守り、殉教できたのだらう。

『沈黙』のクライマックスで踏み絵のキリストを踏むシーンがある。

遠藤周作の言葉の碑



併で「新上五島町」と呼ばれる上五島には狭い島に二十九の教会がある。この地で生まれた友人、下松カトリック教会の近藤氏と一緒に夫婦二組で上五島を巡礼した。

神の沈黙の中でも離島にしがみつきながら信仰を守り続けた五島の先祖の人たちの足跡をたどりながら、生きることに、信仰について考えてみたい。（元山口放送取締役ラジオ局長）